

自己点検・評価について

① プログラムの自己点検・評価を行う体制(委員会・組織等)

敬和学園大学自己点検・評価委員会
(責任者名) 藤本晃嗣 (役職名) 自己点検・評価委員長

② 自己点検・評価体制における意見等

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等	自己評価(令和7年度)
学内からの視点		
プログラムの履修・修得状況	「コンピューターリテラシー」は、PCIに関わる一般常識の講座であるため、1年次から履修可能としており、共通基礎科目の必修科目となっている。また、不合格となった場合でも再履修が可能である。「データサイエンス入門」に関しては、2年次より受講可能な科目であり、「コンピューターリテラシー」の上位講座として実施する。本学における“敬和学園大学数理・データサイエンス・AI教育プログラム(リテラシーレベル)”は、令和6年度より行っているため、「データサイエンス入門」は令和7年度が初めての受講者となる。これら、学生の履修状況や習得状況は、当学のポータルサイトである“Universal Passport”にて確認できるようになっている。 令和6年度の「コンピューターリテラシー」/「データサイエンス入門」の履修状況は次のとおりである。 「コンピューターリテラシー」: 履修者126名、単位認定者116名、合格率92.1% 「データサイエンス入門」: (令和7年度より開講中)	令和7年度MDASHリテラシーレベル認定者16名(履修者144名)取得率11.1% 全学生における取得率2.5%
学修成果	「コンピューターリテラシー」本プログラムの学修成果は、当学のポータルサイトである“Universal Passport”にて確認できるようになっている。成績評価のつけ方は、以下のとおりである。 全体の講義回数の70%以上の出席(11回以上)が単位取得の条件となり、あわせて受講姿勢が10点となる。また、課題点は、ビジネスメール、ビジネス文書、表計算などWordやExcelを用いての課題提出が3回あり、それぞれ10点。グループワークとして、それぞれの課題に対する検討とPowerPointでの資料作成と発表をについて60点を付与する。これらの点数が最大点となるため、ここから減点しその合計が評価となる。 「データサイエンス入門」 「コンピューターリテラシー」同様に、学修成果は、当学のポータルサイトである“Universal Passport”にて確認できるようになっている。成績評価のつけ方は、以下のとおりである。 全体の講義回数の70%以上の出席(11回以上)が単位取得の条件となり、あわせて受講姿勢が10点となる。各章ごとに理解度を確認するための小テストを3回実施し、それぞれ30点を最大点として付与する。本講義のカリキュラムは、“数理・データサイエンス・AI(リテラシーレベル)モデルカリキュラム ～データ思考の涵養～ (2024年2月22日改訂)”に準じて作成されている。 上記2科目の取得にて敬和学園大学 数理・データサイエンス・AI教育プログラム(リテラシーレベル)を認定する。	「コンピューターリテラシー」単位取得者:109名(全120名)取得率90.8% 「データサイエンス入門」単位取得者:16名(全16名)取得率100%
学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	講義終了後に受講者を対象に授業評価アンケートを実施し(令和6年度はコンピューターリテラシーのみ)、当学のポータルサイトである“Universal Passport”にて確認できるようになっている。 授業評価アンケートによる理解度は、良好であり、小テストおよびグループワークなど座学だけではなく内容にしていることが評価されている。 「この授業で教わったことを理解し、身についたと思いますか?」の質問では、「とてもそう思う」「そう思う」と回答した割合は、クラスによるが6割~7割となっており、どちらともいえないまで入れると8割~9割となっている。 また、各回の確認テストや課題によって理解度を深めることができたと考えている。 令和7年度から始まる「データサイエンス入門」においても同様のアンケートを実施する予定である。	今年度から開講した「データサイエンス入門」については、講義のスピードや学生の理解度など、最適化された内容であるの不安が残る。学生アンケートでは、“人文学部に在籍しながらデータサイエンスの講義を受けられたことで、それらについての関心が高まった”など、専門用語や考え方を理解いただいたようだ。次年度は、これらの意見を受けて講義の質を上げていく。
学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度	“学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度”については、令和7年度にて最初の修了者を輩出するため、この項目については翌年度に記載する。	語学を得意とする多くの学生にデータサイエンスを指導した結果、IT企業への関心が高まってきている。これは、新たな進路への可能性を実感できたことであり、未だ履修意欲のない学生へも強いインパクトを与えている。この事例を基に、学生ガイダンスやオープンキャンパスなど、大学が積極的に推進していることをアピールしていく。
全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	前記したように、令和7年度にて最初の修了者を輩出するため、この項目については現在の予定という形で記載する。 全学的な履修者数、履修率については、前期と後期に分けて集計する予定である。またその結果については、敬和学園大学数理・データサイエンス・AIプログラム(リテラシーレベル)を統括するネットワーク委員会にて検証を行い、現状での問題点や改善策の検討を行っていく。最大の目標は、本プログラムの修了者を一人でも多く輩出することにある。	前記したように、今年度の取得者は22名(全学630名)という結果で終了した。制度的には「コンピューターリテラシー」は必修科目であるが、「データサイエンス入門」は選択科目となっていることが、少なからず影響している。今後は、現在の学生が就職を迎えるときの社会環境をイメージさせ、履修すべき科目であることを強調していく。

自己点検・評価の視点		自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等	自己点検・評価の視点
学外からの視点			
教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価		前記したように、令和7年度にて最初の修了者を輩出し、その卒業年度は令和9年度以降となるため、現段階では評価できていない。	MDASH取得者の卒業生が存在しないため、この項目は令和9年度にて記載
産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見		現状では、産業界から意見を収集する機会や仕組みはない。しかしながら、本プログラム修了者の意見を収集できるようアンケートフォームを用意し、修了者に記載を促す予定である。さらには、勤務先の企業からヒアリングを行ってもらい、前記したアンケートフォームから情報を収集する予定である。これらの情報を基に、敬和学園大学としてふさわしいカリキュラムを独自に模索していく。 また、本プログラムは、産業界での実務経験が豊富な教員が担当しており、これらの教員からも現業に近いプログラム内容や手法についての講義運用ができている。	自治体としても、地元企業のAIやDX推進を行っているため、講義ではより実践的な教育プログラムを用いている。具体的には、「製品の売り上げを伸ばすには」、「効率の良い学習スタイルとは」、「農産物の生産量を上げるには」など、PBL的な問いに対して、どのようにデータを活用するのかを検討させている。
数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意味」を理解させること		「コンピューターリテラシー」 1年次における講義であるため、インターネットとコンピュータを大学在学中に活用するためのテクニックや、就職時に必要になる実用的な利用法を学ぶことを大目標としている。履修者スキルを見きわめながら、ビジネスメール、ビジネス文書、プレゼンテーションなど、1人1台PCを用いて、電子ファイルによる小テストを通じてレベルを上げていく。また、グループワークを取りながら課題発表に向けた作業に取り組んでもらう。さらに、著作権、セキュリティ、AIによる社会変化やビッグデータの活用事例(数理・データサイエンス・AIの学習における“リテラシーレベル”の項目に該当)について解説を行う。 「データサイエンス入門」 2年次より受講可能となる本講義は、前期「コンピューターリテラシー」の上位科目となる。“数理・データサイエンス・AI教育プログラム”を活用することを通じ、実データや実課題を用いた演習など、社会での実例を題材に、現実の課題と適切な活用法を学ぶことをカリキュラムに取り入れる。本講義は、“数理・データサイエンス・AI”のリテラシーレベルに該当し、「分かりやすさ」や「社会での活用」、「幅広い視野」を重視した教育を実施する。具体的には、導入：社会におけるデータ・AI活用、基礎：データリテラシー、心得：データ・AI活用における留意事項の範囲を網羅し、講義やPCでの演習を行う。	「学ぶ楽しさ」 現実社会では、あらゆる分野でデータによる解析が行われている。どのシーンでどんな解析手法が行われているのか、身近な例を元に講義したことで、学生自身の気づきに繋がっているようだ。 「学ぶことの意味」 これからの時代、すべての職業や職種でデータサイエンスの知識が活かされる。この分野を知っていることは、これからの時代を担う学生諸君として、価値のある事を伝えることができた。
内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること ※社会の変化や生成AI等の技術の発展を踏まえて教育内容を継続的に見直すなど、より教育効果の高まる授業内容・方法とするための取組や仕組みについても該当があれば記載		本プログラムの内容・水準を維持・向上するために、敬和学園大学では、AIの分野内となる応用情報工学を専攻した教員を配置している。さらに、会社員としての実務経験もあることから、学問的知見の他に実社会での運用例を数多く講義することができる。理論と現実の両サイドからの講義を行うことにより、学生にとって肌身の近い内容(マーケティング・物流・医療・農業など)での講義に心がけている。さらには、修了者からの評価アンケートを活用して、修正を加えることで「分かりやすい」を追求していく予定である。 加えて、生成AIなど技術発展の早い分野であることから、日経コンピュータや人工知能学会などの雑誌からも、情報を提供していく予定である。	単にデータを解析することはアプリがあれば誰でもできるので、解析後に表面化された実態の原因を検討する思考回路を幅広く講義していく予定である。一般社会では、DXという名のもとデータサイエンティストが求められているので、多くのケーススタディを通じて問題発見や解決策検討などPBL要素を含めて講義していく。